

⑤ パネルディスカッション

14:30-15:20

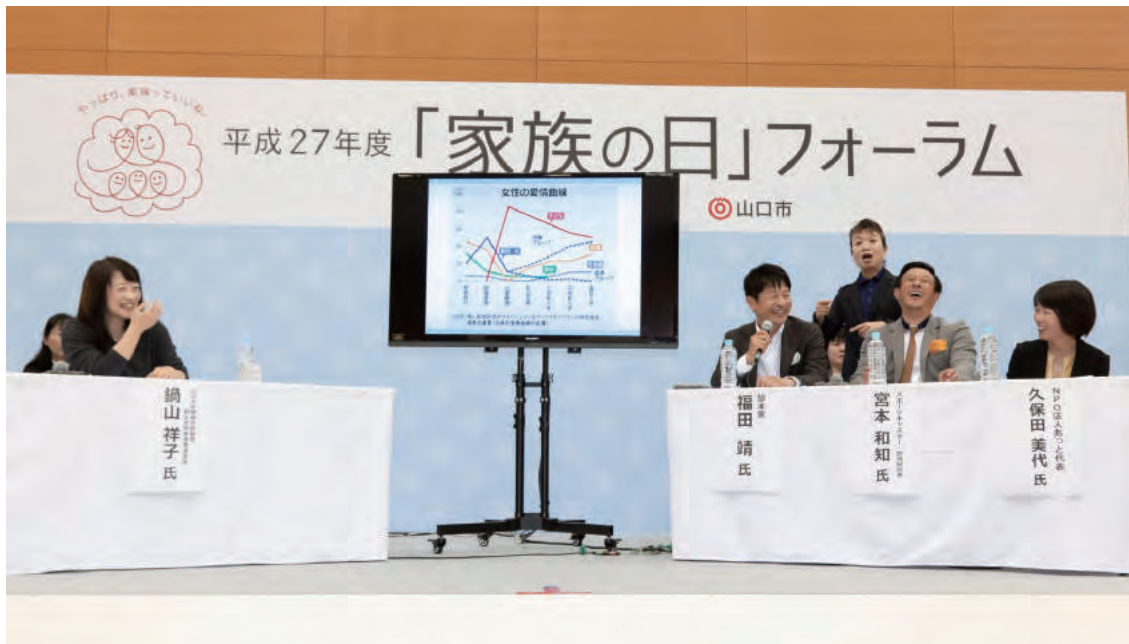
「みんなで子育て応援」

コーディネーター

- 鍋山 祥子
(山口大学経済学部教授、男女共同参画推進室長)

パネリスト

- 久保田 美代 (NPO法人あっと代表)
- 福田 靖 (脚本家)
- 宮本 和知 (スポーツキャスター、野球解説者) (五十音順)



さんきゅうパパ
プロジェクト

さんきゅうパパプロジェクト
ロゴマーク

「さんきゅうパパプロジェクト」

鍋山 今回のテーマは「みんなで子育て応援」です。子育てをする中心はパパとママですが、現実問題はまだまだ子育てのメインはママになりがちですね。

そんな中今年の6月に、内閣府では「さんきゅうパパプロジェクト」をスタートしました。

先ほどのトークショーの中でも少しご説明いたしましたが、ママの産後2ヶ月以内にパパも一緒にお休みを取ったり、働く時間等を少しセーブして、一緒に子育てをすることによって、お子さんとの絆をより深めてもらおう、ママの負担を減らそうというプロジェクトです。「さんきゅうパパ」は、「産休」のさんきゅうと、「ありがとう」のサンキューをかけて、ハッピーな家族にしていけたらいいという取組になっております。かけがえのない命が誕生するときに、パパの存在をもう一度見直そうというか、パパも子育てに関わっていこうというようなプロジェクトです。「さんきゅうパパプロジェクト」のかわいいマークがすべてを表しているのではないかと思います。みんなで支え合って幸せを感じるということですね。で、今日はお三方にぜひご自分のお子さんが生まれたときのエピソードなどをうかがっていきながら、ディスカッションにつなげていきたいと思っております。では、みなさま、自己紹介やご家族のこと、また特に生後すぐの、子育てのエピソードなどを福田さんから話しいただけますか。



鍋山 祥子氏

子育てに関するエピソード

福田 脚本家の福田靖です。僕の家族は、妻と子供が二人おります。上の子は、2001年に生まれました。僕が「HERO」というドラマを書いていた時です。妊娠がわかったときにお医者さんから、予定日は3月3日ですと言われたのですが、そのお医者さんの哲学で、男か女か教えませんと言われて、わからないままになったんですけども、妻がどうしても助産院で産みたいというので助産院でお世話になりました。ちょうど僕が「HERO」というドラマの最終回の最後のシーンを書いているときに産気づきまして、そして助産院ですから四畳半一間の裸電球のなかで、僕が妻を後ろからだっこするようなかたちで、で、その体位が痛いと言えは今度は前から支えるかたちでって、とにかく本当に一緒になって産んだのが上の娘です。娘は予定日どおり3月3日に生まれたので、ももこと名づけました。僕が正直その時まだ脚本家としては食べていけてなかったもので、本当に自分に父親が務まるのだろうか、家族を養えるのだろうか、非常に不安で、決して子煩悩ではなく、むしろ子供に対しては後から来た人で、本当にまあ大変なものを背負ってしまったという実感のほうが強くて、子供を猫かわいがりするという意識はほとんどなかったように



福田 靖氏

思います。

とにかく奥さんを助けること、子育てというよりも奥さんを助けることというのが、僕の役割ですね。「HERO」がそこで書き終わったので、ずっと一緒にいましたし、もう少し大きくなったときには娘と二人で旅行に行って2日ほど奥さんを一人にさせてあげたりという、それが僕にとっての子育てでした。結果的にはそれによって子供との結び付きが強まったような気がします。娘は中学生になっていますけれど、今でも二人で旅行に行ったりしてますので、そういった意味ではよかったと思います。下の子は妊娠がわかった早々、男の子だと今度は教えてもらいました。そして、予定日は5月2日だと。あと3日遅ければと思ったんですけど、まあよくできた子で、がんばって、がんばって3日遅れで生まれてきましたので、5月5日生まれです。上の女の子は3月3日。下の男の子は5月5日。上はももこちゃん、男の子はゆうたくんという名前です。下の子の時はもう子供が成長する喜びを知っていましたので、最初からとてもかわいく思えました。でもそれでもやっぱり僕の中では一緒に何かをすることかというよりも、とにかく奥さんを助けることというのが第一で、彼女だけの時間をもってもらうようにしました。そうすると僕も子供と過ごす時間に何をしなければいけないか考えるし、考えるということは付き合い方も考えるし。結局僕にとってそういうものが子育てだということになったような気がします。

鍋山 ありがとうございます。では、宮本さんお願いいたします。

宮本 はい。私は、先ほど少しお話させていただきましたが、最初の子がもう27歳。そして再婚して今5歳の娘がいます。妻は私と一回り離れております。で、二度育児というものを経験し、今も下の子は進行形なんですけども、人前で叱ったりだとか、そういうことは率先してやっています。我が家でも子供が生まれた時は本当に可愛くて、手の肘のあたりにまでにすっぽりはまるぐらいで、最初は持ち上げるのも怖かったですね。どういう風に抱えていいか、首が座ってないどうしようとか、すごい最初は戸惑いましたよね。だからお風呂入れる時も、なんとか小指と親指で耳をふさぎながらガーゼでこうやったりだとか、そういったことが家族のコミュニケーションにつながって行って、パパ下手だねって言われながらも、「よーし、ちょっとがんばるよ」みたいな感じで、夫婦間での会話が増えました。今、子供の成長が一番楽しみなことです。僕が留守のときも、子供と携帯で会話してほっこりしたりだとか、今は非常に便利だなと思います。とにかく家に帰って早く会いたいな、それだけで仕事をがんばらせていただいています。それが私の現状です。

鍋山 ありがとうございます。では、久保田さんからお話しいただきたいんですが、久保田さんの場合、山口で子育てのサービスをやられてますので、ご自分のことプラスちょっとその他のお父さんお母さんのこともあれば、お話しください。

久保田 はい。私は「NPO法人あっと」の代表をしております、今日も朝からこちらの会場にブースを設けつつ、福田さんと宮本さんのお話を聞かせていただいています。私自身大学4年生と2年生、高校1年生の3人の子供がいます。

子育てしているときにうちのダンナさんが何をしてくれたかなということで、よく思い出すのは、住んでいるのが自宅で主人の勤務地からすごく近かったので、主人が昼休みにいつも帰ってきてご飯を作ってくれたりしてましたね。で、定時に帰ってきて休むことはあまりしなくても、昼休みにご飯を作る、帰ってき

て晩ご飯のおかずも買ってきて作るというのをずっとしてくれてたので、ケンカしたときにも、あのとき助けてくれたなということがずっと残っているので、それはとても感謝しています。今、私たちが関わっている、パパ、ママをみると、やっぱり両極端な気がします。子育て広場も運営しているんですけど、お休みの日にそちらのほうに来てるお父さんもいますし、ずっと働いててほぼ広場のことも知らないし、仕事を一所懸命やるだけなんですという人もいますので、両極端だなと思いつつ支援をしています。

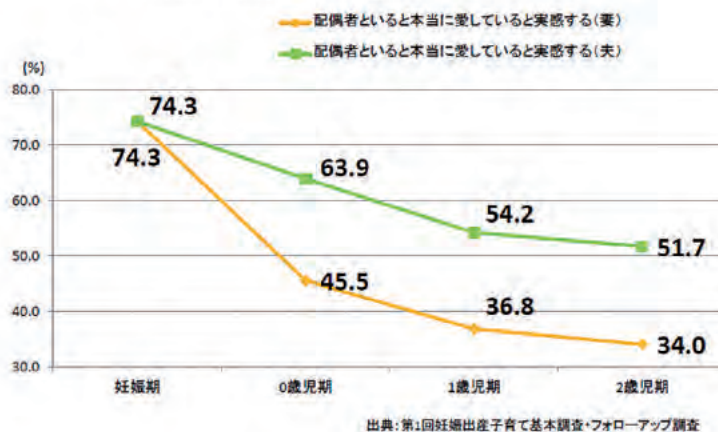


久保田 美代氏

パパとママが共に子育てをすると良いこと

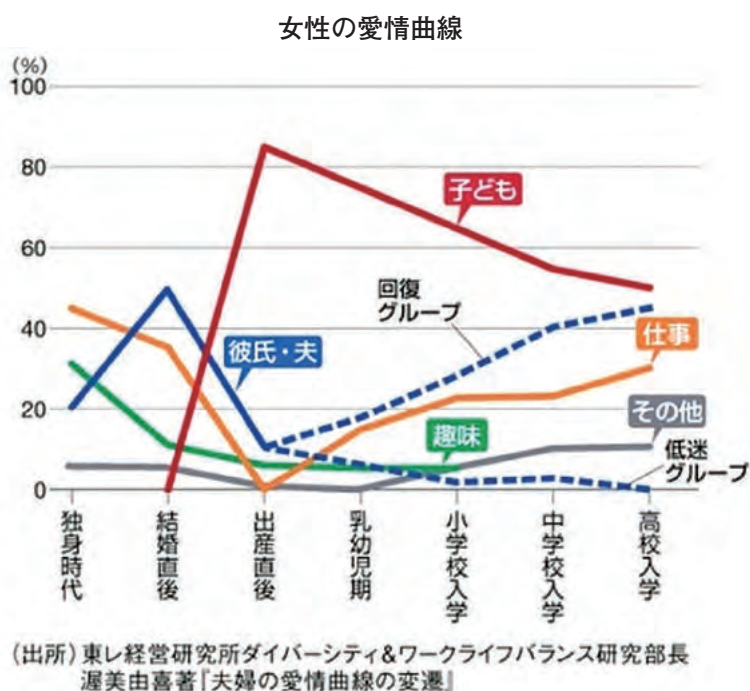
鍋山 はい。ありがとうございます。パパが育児をすることは、やった方がいいなと皆さん思われているんですけど、手を出すとなるとこれが難しい。やっぱり仕事为先というものがあるので、自分がいくらしたいと思っても職場の事情でできないとか。夫婦間でも思惑の違いとかがあって、なかなか難しいところではないかなと思います。ここでひとつ、データを皆さんにお見せしたいと思います。

(図1)はじめての子どもを出産後の夫婦の愛情の変化
(2006～2009年 縦断調査) *同じ夫婦の追跡調査



鍋山 出産後の夫婦の愛情の変化のグラフです。見ていただきますと、妊娠期には「配偶者といると本当に愛していると実感する」という妻と夫の割合が74.3%で同じです。お腹に赤ちゃんがいるときにはお互い愛し合っているということ。で、これがですね、0歳児期、1歳児期、2歳児期になると、まんべんなく下がっていくんですが、下がり方が女性のほうが激しく下がるという。男性はまだ奥さんを愛していると思っているけれども、奥さんのほうが、あれ私愛してたっけという、ちょっと疑問を感じるようになってくる。願わ

くば上がってほしいと思うんですけど、愛の結晶である子供が生まれたらお互いへの愛情が下がっていく。これは2人目、3人目、4人目をなかなか考えにくくなるということにもつながるんですよね。で、もうひとつのグラフ、皆さんのお手元の資料にないグラフなんですが、女性にターゲットを絞って、女性の愛情曲線というのを見てみたものです。



鍋山

ワークライフバランスに詳しい渥美由喜さんが調べたデータなのですが、子供が小さい時にお父さんが非常に子育てを手伝ってくれた場合は、奥さんの愛情が保たれるというか、そんなに下がらないんです。なので、子供が生まれた直後に旦那さんがどれだけ育児に関わるかというのが、その後の夫婦生活、そのうち子供は巣立っていきますので、また夫婦二人が残るわけですが、その時の夫婦関係にも非常にいい影響を及ぼすというデータがでてます。今回は「さんきゅうパパプロジェクト」に関しても、先ほど福田さんのお話にもあったように、奥さんを助けるというような思いや子供がかわいくてしかたがないという思いでお父さんが育児に関わると、結果的には夫婦間の愛情を保つ結果になる。だからこれは、「さんきゅうパパプロジェクト」ですが、「夫婦円満プロジェクト」ともいえるというわけです。

山口県では全国的にみて育児環境にどんな特徴があるのかということ、実はいろんな社会統計や社会のデータをみると、おもしろいことに山口県というのは全国の都道府県のだいたい真ん中なんです。特徴がな

いというか平均値なんですね。だけれども、合計特殊出生率という子供が生まれる割合は、山口県は全国平均よりちょっと高いんですね。今全国で1.42のところを山口は1.54ですので、まあ微々たるものですが、少し高い。で、さっきトークセッションで宮本さんとお話しさせていただいたように、やっぱり非常に自然環境が豊かで、子供は育てやすい環境にあるんじゃないと言われていたりします。もう一つ、実は山口県は三世同居率が低いんですね。核家族が多いってことです。高齢者の独り暮らしの割合も高いんです。なので、核家族でお父さん、お母さんだけで子育てを頑張らなきゃいけないような人たちが多いということなのです。その中で、じゃあ、お父さんがどう関わるか、地域がどう関わるかっていうのは非常に重要なテーマであるということが言えるわけです。山口県の傾向をお話しさせていただきましたけれども、山口県で子育てをしていくときに、どんな難しさがあるのか、NPO法人として久保田さん、日々子育て中のお父さんお母さんをご覧になってますけれども、こういう助けがあったらもっと楽しく子育てができるんじゃないかなとか、こういうサービスが必要なんじゃないかなというようなヒントがあれば、お話しいただけますか。

久保田 私たち「NPO法人あっと」の立ち上げた理由が、自分たちが子供を生んで、「あれ子供って私たち夫婦だけで育てるのは絶対無理じゃない?」、と今更ながら気づいた人たちが始めた、たぶん県下で母親が立ち上げた一番最初のNPOなんです。どんな支援をパパ、ママは望んでいるのか、その人たちが子育て真っ最中の時だからこそ気がつく課題というのがあります。今私たちはNPOとしていつ来てもいいし、いつ帰ってもいい広場というのを毎日開いています。その場であがった課題からヒントをもらって事業をしています。どんな支援があるかですが、山口市では山口市の中で困っている人を支援するために始まった活動は結構あるんですよ。先ほど言われたみたいに山口県は同居率が低く、同時に転勤者も多いんですよ。行政の街でもあるので、で、転勤族のママたちが転勤族の人たちを支えるってような、その名も「てんてん」というサークルみたいなものもあつたりもしますし、あとは、小児医療を考えるママたちの会など。昔であれば、隣同士、隣のおばちゃんに育てられたりとか、私もそういう時代に育ちましたが、転勤族だと隣に誰が住んでるかわからない、支え合える人がいないという状況になります。そこで妊娠とか出産をするときに支え合える団体を、自分が困った経験から作りあげたママたちもいます。そういう自分たちの課題を活動のエネルギーにしてる団体はたくさんありますね、私が知っているのは山口市だけですけれども。

鍋山 ありがとうございます。困ったこと、何か欲しいサービスを感じて、自分たちでやっつけてしまおうというように、地域で助け合いというのが山口市には息づいているということなんですね。

パパの子育ての入り方

鍋山 宮本さんにおうかがいしたいんですけども、やっぱり地域でママたちがつながっていく中、もっとパパ仲間であるとか、地域にパパとしてどう入っていけばいいのかというところで、何かお感じになるところやヒントがあれば教えてください。

宮本 僕は葉山というところに住んでいますが、そこで「葉山巨人軍」という少年野球チームを作りました。まずそういった組織をつくるにあたって、なぜそこで少年野球が必要だと思ったかの大きな要素として、実は僕の住んでる葉山の中学校の様子を見て感じることもあり、よし、小学校のうちに野球というものを通じて、何かできないかなと、この地域に何か貢献したいなということで、そこで僕がひらめいたのが野球チームで、小学校のときから徹底的に礼儀だとかそういったことを教えようっていうね、そういった強い気持ちになったのがひとつ。チームをつくって7年目ですけど、今の中学校はチームの卒業生が活躍しています。野球しかやったことのない僕が、野球を通じて子供を育てることに貢献できているんじゃないかなと思いますね。うちの小学生のチームも7年間やっていると、小学校のときにレギュラーとれず試合にも出られなかった子が、中学校に入って急にエースになったり、4番打ったりと、体が大きくなってボールが飛ぶようになった、速いボールが投げられるようになったということで、急に変わるってことがあります。小学校のとき「うちの子はダメだ。試合にも出れないわ」ってそこで終わらずに、いつ化けるかわからない可能性を秘めているっていうことをしっかりと、野球に限らず、子供たちを信じてとにかく続けさせるっていうのが、子供たちにとって一番大事なことだと思いますね。子供たちの可能性を秘めてる部分を保護者は大事にしていてもらいたいなと思いますね。



宮本 和知氏

鍋山 私の息子も野球少年でして、ずっとやっています。野球チームやスポ少もそうですけれど、やっていくとお母さんたちはがんばってお世話するんだけど、パパの参加がなかなか難しいということなんです。

宮本 やっぱり僕もチームを見てて、お父さん方、保護者の方が一生懸命な選手は伸びます。その練習なり試合に保護者の方が顔を出すことによって、家に帰って夕食時に話題が野球の話題になるんですよ。今日はどうだった、ああだった。子供は一生懸命野球やってきたのに夕食時に子供は話したいのに話せないと、コミュニケーションのチャンスがなくなりますよね。だからそういった意味では顔を出せるときには顔を出して、野球だけじゃなくていろんなスポーツでもいいのでそういう事を保護者の方も理解していただければと思いますね。

鍋山 福田さんは先ほど自分が育児にかかわるときに、子育てのほうから入るんじゃなくて、あくまでも奥さんを助けるというきっかけで入るとおっしゃっていました。そういう思いになられるに至った経緯を詳しくお尋ねしたいんですが。

福田 僕は自分の仕事柄、育児も含めてネタになるとしてしまうので、せっかくだから子供をだっこして近所の公園に行くだけでなく、旅行に行ってくるよということをしてたのですが、飛行機の中で娘のオムツをかえていると、まあCAさんからたくさん声をかけていただける。僕はそういったつもりはないんだけど、素晴らしいパパだといって。しかも行った先、北海道の友達の奥さんに、いやぁうちの妻を楽にさせたくて、それで来たんですよって言ったら、まあ素敵なパパだわなんて言われるんですよね。それは自分のためにもいいなと思ひまして、以来そういう考え方になったんですね。僕は家族の最小単位は夫婦だと思っているので、子供はいずれ出ていきますし、だからさっきのグラフなんかはもう本当にぞっとするような話だと思います。ですからとにかく奥さんを助けるためにどうしたらいいのかということのを常に考えてるということと、あともう一つは、助けてもらうとすると、うちの奥さんの両親の家がすぐ近く、弟夫婦の家もすぐ近く、妹夫婦の家もすぐ近くだから、うちの奥さんの親族がいとこ全員を集めて育ててると。とにかく何かあったらすぐ預かってもらう、みてもらう。そのかわり、いともみる。っていうふうに、その助けを借りることに遠慮はしないし、僕も婿として全くそこは躊躇もなく、よろしくお願ひしますと言ってるという、そういうのにもすっかり慣れてしまいました。もう、格好いい話なんだか悪いんだかよくわからないですけど。

鍋山 助けてもらうことにこう貪欲になるというんでしょうか。変な躊躇はいらぬというか。やっぱりそれは重要なところじゃないかと思うんですね。それが宮本さんの場合は近所でそれがあつて、近所のそういうつながりがまだないときは、親族が近くにいる頼れる場合は親族であるということですね。

福田 たった一人のママ友でも、うちが様子見るからおいでと遠慮なく言えるといいですね。向こうだって困っているんですから。

鍋山 お互い様ですよ。今のようなつながりを、久保田さんは、親族でもなく、まあご近所っていえばご近所ですけども、もうちょっと広い範囲でのサービスという形で実現されてるということですよ。子育てをするというのは、ママ一人じゃ当然できないし、ママとパパとだけでも足りないところがある、心もとないところがあるというときに、それを広げていってみんなで助け合うような体制というのが大事かなと思うわけですよ。お父さんがサラリーマンの方が多いわけですけども、お父さんがいかにして育児に時間と精力を割り振ることができるのかというところで、何か思うところがある方いらっしゃいますか。こういうふうにしたらパパもお母さんを助けることができるんじゃないかとか、仕事をしながら育児に参加しやすくなるんじゃないかっていうところのヒントがあれば教えていただきたいんですが。

宮本 とにかく、自然に気がついたら何かをする。で、嫁にありがとうって言わせたいということでしょうか。「ありがとう」という言葉の反対語って何かご存じですか？ これね、「当たり前」というんですよ。だから常々このありがとうという気持ち、これは当たり前じゃないんだよと。朝起こしてもらってそして朝ご飯が目の前にある、これは当たり前じゃないんだということです。パパありがとうとなにげなく言ってもらえるのが僕の中での喜びでもあります。

鍋山 何かこうサービス精神といいますか、家族なんだけれども、当たり前じゃなくて、何か喜ばせてやろうと

か、そういうことですね。それで自分も喜びを感じるという。

宮本 そうです。それで子供にも笑ってもらいたいとか。パパ、サンキューって言ってくれるようなね。そういったことが今僕にとっては、家庭内での生きがいなのかなって思いますね。

鍋山 そうですね。そういうときにママとしては、やり方が気に入らないとか、こうじゃないんだけどなと思ったとしても、ダメ出しばかりをするんじゃなくて、ちょっと広い心でありがとうと言うところを表に出すと、さらに喜ばせてもらえるかも、というのが夫婦間でいうと大事なのかなというような感じはしますよね。久保田さんは、いろんなご夫婦を見聞きされていると思いますが、ママたちがいろんなことを話される中で、山口県はわりと外から見るとまだまだ男女の役割分担というのが、男は仕事、女がケアして当然だと思われるというのが強い地域とされているんですが、何かそこらへんで、いやそんなことはないよとか、実際山口のご夫婦はやっぱり役割分担感が厳しいよとか、実情はいかがですか。

久保田 ちょっと自分のうちのことで言わせてもらおうと、うちのダンナさんの話ですけど、男の人だから女の人だからとか関係なくすごく気がつく人なんです。今日のスリッパも準備したのは彼ですし、途中、「会場に自動販売機あるの」っていわれて、「どうかね、なかったら我慢する」って言ったら、「コーヒー置いとくよ」っていう感じで。でもそれは、宮本さんが言われたように、できる人ができるタイミングでっていうのは、気がつく人が気がついたときにやってるというところがあって、それこそ当たり前じゃなくていつもありがとうという感じですね。いつも感謝してます。だからうちの場合は男女差はないかなと思いますね。

鍋山 今のお話と宮本さんのお話を合わせると、やっぱり当たり前って思っちゃったら成長がないですね。これが当然だと思ったら感謝もないし、伸びしろもありません。何かもっとう、当たり前じゃなくて、あ、こんなことをしてもらって嬉しいとか、これって私恵まれてるんだというような感覚が増えていくと夫婦関係、家族関係もおもしろいものになっていくような気がしますよね。じゃあそういう中で先ほど福田さんのお話にあったように、子育てに自分が積極的にかかわっていくこと、旅行に一緒に行ったりとか、お母さんなしでお子さんと二人で過ごす時間を持ったりという中で、パパとお子さんとの関係になにか感じるものってありましたか。子育てにかかわることによって子供と自分との関係がどう変わったかなど。

福田 上の娘は中学校3年生ですが、この冬も二人で旅行に行くことになっていて、いわゆる思春期という一番難しい時期に、下の子が生まれたこともあって、僕が常に彼女と一緒にいたので、もうすっかりパパっ子にはなってくれてるんですが、要するに一緒にいたという事実ですね。パパはいつもその時一緒にいてくれたということ。そうでなければ、何かあったときに出ていくと娘から「誰？」って言われると思うんです。あなた大事な時にいなかったくせに、こんなときに出てきてなにを偉そうなことを言ってんだと言われるのが嫌なので、僕は常にどんな局面でもそこにいたよというふうにしたい。それは娘に対してです。それはイコール奥さんに対しても同じように、あなたはかまってくれなかったとか、あなたはあの時いてくれなかったということはないようにしたいと思うようにしてます。今のところ娘とは良好で、下の子はまだ小さいんですけど、まあ男の子は甘えっこのので、ママ、ママといきますけれども、それでもやっぱり同じように、二人でどこか行くとかはしてます。



鍋山 お三方の話をうかがっていると、一緒にパパとママ、まあ親戚の方もそうですけれども、子育てと一緒にかかわるといことは宮本さんの話だと夕食の話題になるとおっしゃってましたけれども、やっぱり子供が大きくなったり巣立ったあとも、話ができますよね。あの頃はこうだったよねとかあの時はこうだったよねとか。そういうイベントごとの思い出を共有できる家族というのは、それだけ家族の絆が強くなるということにもなるんじゃないかなと思うわけですね。家族もそうだけでもこれを地域にもっと広げていくと、あの時あの隣のおじちゃんあであったよね、とか、あのスポーツのあのチームのあの試合は惜しかったよねとか、子供が15歳、20歳になっても共有の話題として出てくる。

子育てを振り返って

鍋山 そういう積み重ねが家族の絆というものをつくるんじゃないかなと感じたりするわけです。みなさんそれぞれご家族で働き方も違うし、家族関係もいろいろ違うので、こうやったらいいですよというモデルは提示しにくいですね。けれども、気持ちの問題というかスタンスとして、一緒に、できる限り時間を共有するとか、出来事を共有するというのはすごく貴重だし、大事なことなんじゃないかなと思います。もうお時間がせまってまいりましたので、ぜひお三方にお一人ずつ、お話しいただきたいんですが、自分のお子様が生まれてから今までのことを振り返って、こういうふうな接し方で自分はやってきてよかったとか、逆にいやもうちょっとこれはこうやったらよかったというような失敗談をお話しいただいて、みなさまがたに、じゃあ自分はこうしようというふうに持って帰っていただきたいのですがいかがでしょうか。まず私から、今日は全然自分のことを話してませんので。実は、私のダンナはもう10年間飛行機通勤をしております、火曜日に横浜のほうに行って木曜か金曜に帰ってくると。で、家にいる間はご飯も全部作って



くれるし、子供たちの行事には全部出るというのをやってるんですね。だから非常に私は恵まれていて、自分の仕事もできていますし、そういうところでは本当に感謝、感謝なんですけど、反省点としては、先ほど宮本さんのお話にありましたが、子供の行事ですよ。野球の試合に行ける範囲は行ったんだけど、全部は行けなかったとか、送り迎えもなかなかできなかったというところで、そういう意味でいうと、家族全員がなるべく早くみんな自立するように促しながらやってきましたので、寂しい思いもさせたかなと。この先大きくなった時に私をかまってもらえるかなみたいな、そういう心配もありつつなんですけれども。その時々全力投球でやってきましたので、その点に関しては悔いはないかなあと感じているところです。どなたからでもいいんですが、どうでしょうかね、福田さんから話しいたけませんか。

福田 失敗したと思ったのは1回あって、それは下の子が生まれた時に下の子にかますぎて、上の子がおかしくなったときですね。そんなことがあるのは重々わかっていたはずなのに、いつの間にか表情がなくなってしまって、何か悪いことをするようになって、結局あれはかまってほしかったんだと思うんですけども、学校に相談に行って、「先生どうしたらいいんでしょう」と言いましたら、抱きしめてあげたらどうですかと言われて、そんな当たり前の言葉で慰められるなんて、いやいやそんな恥ずかしいこと言わないでくださいって言いながら、抱きしめたら治りました。「ああそうなのか」と思いましたね。その瞬間から表情が変わるのがわかって、ああ子供ってそうなんだと思ったのが、大きな失敗であり、成功であったと思います。あと上の子はもう僕の仕事のことを理解していますが、下の子は理解してなくて、そして仕事柄、僕の書いたドラマが世間でバッシングを浴びるような不評を買えば、子供はいじめられるかもしれないとか。自分の父親としての生き方、ありようと、仕事で表現してることというのが、なるべく誇れるものになるように、それを意識していくし、いかなければならないと。たとえば子供にテレビばかり見てないで本を読み

なさいというからには自分も本を読んでないと、テレビを見ていながらそんなことは言えないし、フェアに接していこうと思っています。

宮本 たぶん数々の失敗はしてると思うんですけども、それを感じないのが僕の失敗でしょうね。でも失敗が許せる失敗だったら全然いいと思うんですよ。よく僕のチームの子供たちに言うんだけど、いっぱい失敗しろよって。失敗してもなぜ失敗したか学べるからプラスだよって。一番悪いのはチャレンジしないことだということを言っています。あとはもう本当に家族はチームなんだなって思います。で、やっぱりチーム力というのは、家族だけでなく、近所、自治会、その街の人たちというのが一つのチームになってくれて、みんなが助け合っていければ良いと思います。子供は大人の背中をしっかりと見ているので、普段の自分の行動と言動も常に子供が見てるんだ、君は教育者として、大人としていいのかと思いながら生活していくと、自然と子供の見本になれるんじゃないかなと。舞台の上で偉そうなこと言ってるだけではなく、そういったところから正していけると、いろんな叱り方もできるだろうし、子供たちのために何とか、プラスになればいいなあということを常々思っていけばいいと思います。

久保田 今でもときどき家族から非難というかからかわれるのですが、我が家は3人の子供たちの小さい頃の映像や写真が結構あるのですが、子供によって写真の枚数や映像の長さに差があるんですよ。そこは反省しています。残るものは思い出になるので良いのですが。

鍋山 残るものの中に自分への愛情が映ってたりすると、それが宝物になったりしますよね。

宮本 でもこれわかるね。うちの嫁は妊娠中に写真撮ったりもしていて、先日うちの5歳の子供に、このお腹の中に入ってたんだよとか生まれたての赤ちゃんの時の顔を見せると「えー私こんなだったの」って言いながら喜んでいました。アルバムって、一生残るものだから気をつけなきゃいけないですけど、本当に見直していくとそのころに戻れるというのはいいと思いますね。

鍋山 今のお話にもあったとおり、夫婦であるとか、子供が増えて家族であるとか地域であるとか、そういうところに共通の体験や共通の出来事をいかに共有できるかということですね。家族とか地域とかで共有できたものが歳をとる中で宝物になって自分を作っていくと思うわけですね。それが、ママと子供だけの思い出じゃなくて、そこにパパもいて、近所の人もいて、で、そのもっと広い地域があってこういうイベントがあって。そういうふうなものが思い出せるようになるというのは、非常に豊かだし、宝物ですよ。この山口で子育てをした宝物になっていくのではないかなというふうに思うわけです。で、今回は「さんきゅうパパプロジェクト」ということで、パパがいかに子育てにかかわりますかというお話を中心にさせていただいたんですが、幸せをおすそわけじゃないんですけど、自分一人に閉じ込めてしまわないで、パパにも近所の人にも地域にも子供という幸せをわけて、みんなで育てていくような、そういう地域にできたらいいなというふうに感じながら、ちょうどお時間になりましたので、パネルディスカッションはここで閉じさせていただきます。どうもみなさんご清聴ありがとうございました。